

文部時報

第1120号

昭和45年11月

地方と文化 今 日出海 2

▷座談会◁

地方芸術文化活動の育成について..... 10

(出席者) 小林 敦夫・荒垣 秀雄・田中 忠雄

加藤 衛・(司 会) 吉里 邦夫

文化の振興と地域開発 金田 智成 31

地方芸術文化振興計画の推進 土生 武則 36

地方文化と文化財保護 内山 正 41

兵庫の文化 菱川 文博 47

文化政策の国際会議 安達 健二 53

京都・奈良伝統文化保存

シンポジウムについて 加藤 惣助 58

地方芸術文化行政状況調査について 大谷 正明 63

~~~~~  
[現地ルポ]⑩

庶民の中に生きている備中神楽 ..... 山根 堅一 67

[随想] 秋日雑感 ..... 西川 良三 72

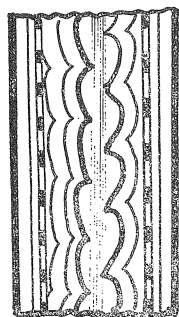
[教育研究所紹介]⑭

佐賀県立教育研究所 ..... 宗 正男 76

[連載第33回]

人物を中心とした高知県教育郷土史 ..... 橋詰 延壽 82

文部省重要通達一覧..... 95



表紙 菅沼 隆 カット 須貝実早子

## ▶筑波新大学の構想発表

筑波新大学創設準備調

査会は、さる10月21日総

会を開き、「筑波新大学

のあり方について」の中

間まとめを発表した。同

調査会は今後各方面の意

見を聞き、明春までに結

論をまとめる予定である。

〈写真は総会の席上あい

さつする柴沼直会長〉



## ▼壮年体力テスト会開く

10月10日の「体育の日」、国立競技場において、「壮年体力テスト会」が開かれた。

日頃、職場や家庭にこもりがちな会社員、主婦など約300人が参加し、ジグザグドリブルや急歩などの体力テストを受けた。

〈写真は急歩のテスト風景〉



## ▲教育課程審議会が「特殊教育」について答申

教育課程審議会は、さる10月23日総会を開

き、昭和44年12月に文部大臣から諮問を受け

ていた「盲、聾、養護学校の教育課程の改善

について」答申した。文部省は、この答申に

基づき、新学習指導要領を作成し、小学部は

昭和46年度、中学部は昭和47年度から新教育

課程を実施する予定である。

〈写真は坂田文部大臣に答申する木下会長〉

<座 談 会>

# 地方芸術文化活動の 育成について

△出席者▽

(発言順・敬称略)

小林 敦 夫

(三重県立三重文化会館長)

荒垣 秀 雄

(評論家)

田 中 忠 雄

(武蔵野美術大学教授)

加藤 衛

(日本アマチュア演劇連盟理事長)

(司会)

吉 里 邦 夫

(文化庁文化部長)

## 一 芸術文化行政の現状と問題点

吉里(司会) 非常にお忙しい先生方ばかりでございますが、本日は私どもの企画にご賛同いただき、お集まりくださりまして、恐縮に存じます。

きょうは地方芸術文化活動の育成につきまして、忌憚のないご意見をいただくことにいたしまして、私が司会をさせていただきます。文化庁ができてから、いろいろな施策を講じてきておりますが、本日のテーマは地方芸術文化活動の育成ということでございますので、その面に焦点を当てまして、私どもが現在やっております施策の基本的な姿勢をお話申し上げ、糸口にしたいと思っております。

私ども、地方芸術文化の活動の育成には、二つの問題点があると思っております。

一つは、地方独自の文化を育成する、たとえば地方に従来からあるいわば固有の文化、伝統芸能等の育成ということがございます。それともう一つは、そういう伝統芸能の育成、保存というもののほかに、住民の文化的

な素養、教養を高めていくということがございます。

明治・大正・昭和三代美術名作展というようなものを住民に直接ぶつけてまして、鑑賞眼、美術に対する素養を高めていく、中央でやります芸術祭を地方に回していく、あるいは青少年に対しましては、青少年芸術劇場と銘打ちまして、オペラ、交響楽、新劇、能・狂言、文楽などのすぐれた公演を、レベルを低めないで直接青少年にぶつける、というような施策をとっておりますが、それらの施策には地域の子どもを含めまして、住民の文化的教養、素養を高めるというところに目的があるのではないかと考えております。



吉里 邦夫氏

また各種の文化活動が盛んになるように文化的な基盤、あるいは条件を整備すること、ことに、重点を置いておるつもりでございます。

この二つが私なりに考えますと、文化庁がやっております地方芸術文化活動のもろもろの施策に共通に持つところの基盤、姿勢ではないかと思っております。しかし、いろいろな悩みや問題を持っておるのであります。たとえば、地方の文化と中央の文化はどうも格差があるといわれておりますけれども、今日のマスコミの発達、あるいは交通の発達、あるいは生活の向上というようなことからいいますと、きょうの地方文化はあすの中央文化になり、中央文化は時々刻々地方に流れていくという時代におきまして、どこに焦点を当てて文化行政をやったらいいのか、という悩みが、一つございます。

いま一つは、終始ついて回ることでございますけれども、国なり、都道府県なりという公的機関が文化行政をやる場合に、どうしてもそこに限度があるだろうと思えます。言いかえますと、芸術文化そのものは、芸術家なり、あるいは芸術文化団体そのものがつくり

出し、活動していくところに本質があると思えますが、それに対して公的機関が果たす役割は、それを引き上げ、助成し、あるいはそういうものが育っていくような基盤を育成する、ということにポイントを置くべきだと思いつつも、現時点ではそういう団体の活動もなかなかまだ活発化していないというようなことから、うっかりすると熱心になればなるほどそういう方々に迷惑をかけ、あるいは引きずっていくというきらいが出てき過ぎはしないかということも考えられます。そこら辺のかね合いをどうするかという問題がございます。それはともかくとして、現在まで国なり、地方公共団体なりの文化行政に対する施策には、金があれば何かすればいいのじゃないか、食うに困るような場合にはやらないでもいいのだ、こういうような姿勢が抜けないというらみがあります。そうではなくて、文化というのはやはり絶対に必要な糧であるという姿勢が実は足りないように私自身も思っております。

本日は、いい機会でございますので、諸先生方のご意見をいただきまして、地方の方々にも問題を提起すると同時に、私ども文化行

政をやっている者にも示唆を与えてもらえれば幸いだと思っております。

本日ご出席いただきました諸先生方は、私どもがやっております「地方芸術文化振興会識」という、地方の文化に対するニードをくみ上げる催しに参加をしていただきまして、いろいろな点で地方の事情もご存じの方が多いわけでございますから、そういう体験を通じてながらご意見を出していただければと考えておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

小林先生は地方の教育長もやりになって、行政の立場から他の行政との比較とか、他の芸術家の方々との接触も別の面でおありだろうと思っておりますので、ご体験を通じて、どういう隘路があったとか、その反省からどういことがほしいかなど口火をお切りいただければ幸いだと思えます。

△「芸術文化行政」のわかりにくさ▽

小林 率直に申しますと、私、教育長を二年半ばかりやっておったわけです。何といつても県の仕事は予算ということが大事な仕事になるので、年に一回予算を編成するときにはなかなかがんばるわけなんですけれども、実

あいつたすぐれた人物がおられるとその地方が一つの文化の中心地みたいになって、

「敦島のやまところの人間わば……」

の和歌にしても、古事記、日本書紀の研究とか、国学を中心としての文化の中心地であり、聖地であり、そして全国からたくさんの人たちが弟子入りして、あそこに集まったんだろうと思う。ほかでも吉田松陰が萩におる、それから二宮尊徳が小田原にいる、佐久間象山が信州松代におる、それから近江聖人——中江藤樹が近江におる、ということになると、やはりそこに弟子入りする人たちが集まって、かなりのにぎわいを呈したのだろうと思うのですがね。いま松阪に行っても「鈴屋」を知らぬタクシーの運転手がずいぶんいるの



荒垣 秀雄氏

は私自身が出ていって知事や財政担当部長なると、真正面から芸術文化に関連して議論をやるというところまで実はやっていなかったのです。たまたま今度文化会館にきまして、いままでも大きな盲点みたいなものがあつたのだな、たいへん重要な領域があつたのだな、ということを感じました。そこでいろいろ考えておつて突き当たってくるのは、「芸術文化」というのが何となくわかりにくい、説明しにくいということです。大事だと皆いつてくれるし、大事だということは皆賛成なんです、大事だということだけで終わってしまう、財政当局と話をし、特に要求を通そう、ということになってくるとどうしても「芸術文化行政」の役割というか、相手を納得



小林 敦夫氏

ですけれども、当時は一体どうだったんだか。国なり、県なりが予算をつけるとかつけぬとかいったような問題を当時に当てはめてみると、藩がそれを相当助成したのか、あるいは地方民がそれをより立てたのか、どうなんですかね。

小林 そこら辺よくわかりませんけれども、「鈴屋」というのは松阪の公園の中に遺跡を保存しておりますね。最近では、前の市長がそういう方面に着目されて、本居宣長のゆかりの人もいろいろな資料を集めておられます。それを松阪市のほうへ寄付をなさいます、相当貴重なものがあるのでございます。これを今度「鈴屋」の遺跡の保存会を立て直しそこへ収蔵いたしまして、本居研究の総本山ともいうような場所にすべきだという意気込みで、本居宣長の記念館をつくり、今後いろいろな研究が進められるような場所にしていきたいと考えて取り組んでいるわけです。

△地方文化の特質と国土▽

荒垣 当時は学問、文化の中心みたいになって相当にぎわったのでしょね。そういう意味においては地方文化の典型的な一つの地

させる理論がいろいろあるのか、そのようなことを大いに感じましたね。

吉里 小林先生のおっしゃっている立場がどちらかといえますと、行政をおやりになった立場での苦勞と示唆が入っていると思います。苦勞の種は、絵なり、文学なりは好きな人がやっておればいいのだ、それを国として、公共団体としてお助けするのは、金でもあまればやればよいのだというぐらゐの認識がいままではありはしないか。しかし、フランスあたりを見ますと、「文化」というのが、今後の社会生活、あるいは国の発展とかいう意味では欠くべからざるものである」という認識が基盤にあるわけですね。そこら辺の認識が足りないような気がするのですが、いかがでしょうか。

## 二 文化の中心地の形成

△中心地形成の条件▽

荒垣 ちょっと三重県の話をしたと思うんですが。三重県に昔本居宣長がおったところは文化の中心地みたいな、ことに国学勃興のころは三重県が文化の聖地みたいなもので、あ

点であったわけですがね。

下つては尾崎聖堂とか、真珠王の御木本幸吉だとか、文化功勞者の中山伊知郎とか、東畑精一とか、なかなか偉い人が三重県には相出しています。ただ東畑さんにいわせると、三重県は「伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ」ということをいうけれども、「伊勢は中でもつ」のだそうです。三重県は第一級の人物が、出ていないのだということです。総理大臣も、陸海軍大將も一人も出ていない、気候風土がよくて、山のさち、海のさが豊かなもんだから、岩手県みたいな僻地の貧乏県みたいなあまり発奮しないというのですよ。

静岡県でもあそこ高校、大学を卒業した者は全部県下に吸収され、他国に行かないのです。県下の中小企業の中に入っている、自分の家業を継いだりして、大学を出てもみんな県下におさまってしまう。ですからああいう温暖な恵まれた土地では、やはり穏やかになるのです。

小林 県民性に対して批評が一つ出たわけでございますけれども、そこら辺は小藩が分立しておったこともあるし、それから何といつてもあれは伊勢路というところでございます

して、全国の人があそこに参って、そこである程度食っていけるというような形がありまして、それで気候風土がたいへんいいもんだから、そういうことになるわけなんです。県政においても指摘されました。意欲的な態度が弱いということが指摘されて、たとえば国体をぜひやろうという中にも、そういうものを通じてでも何かひとつもって意欲を持つような意識を持っております。

吉里 いまのお話にもありましたように、地方文化という場合に風土、地理的な条件が非常に影響するとか、昔の藩の施政が影響しているというようなことから考えますと、今日のテーマである「地方文化」についても何かそういう示唆がありますね。藩の施政にかわるものはいまだに例えば都道府県なり、あるいは市町村なり、あるいは国なりということが考えられないといけないわけですね。

△市民の主体性と行政の役割▽

田中 この間総理大臣が文化芸術家を大ぜい招いて何かやりましたね。そのとき、坂東三津五郎さんが、「佐藤内閣ができてから一番よかったのは文化庁をつくってくれたこと」で、おかげさまでわれわれも少し日の当



田中 忠雄氏

たる場所に出たような気がする……」というようなことをいっておられるが、いま私は文化庁で一番いいことをしているのは、ほんとうに荒れかけている古典の保護の仕事をしていることだと思うのです。これが文化庁のやっている仕事としては一番実効をあげている。目に見えて効果をあげているのじゃないかと思えます。それに比べますと、いまおっしゃったような地方文化の振興策という現実問題のほうは、なかなか実績があがっていないのじゃないかと思うのです。

それから、この間じゅう私あちこち歩いてみて、地方文化というのはこれ以上に奨励したり何かする必要があるのかと思いましたが。というのは、私、絵かきで美術方面です

けれども、どこの県に行っても美術関係の展覧会は相当盛んで、非常に優秀な人が出てきています。盛んであるということだったから、地方は中央にそんなに劣りはしないということを感じました。それからもう一つは、県の文化関係の予算がひどくでこぼこがあるわけですが、そのでこぼこが、そのまま芸術文化の格差になっているかというところでもない。いまお話がありました静岡県は、非常に文化関係の予算は貧弱なところでした。新潟県も貧弱です。ところが新潟は県の予算が貧しいわりあいいろいろなことをてきぱきやっています。これは政府、あるいは地方の政治をとっておられる方が援助したからといってよくなるものでもなさそう、ということばかり文化というものは民間といいますか、民衆のものなんであって、奨励してもしなくてもそこの人たちの教養というか、関心が高ければかなり成長するものじゃないかと思っただけですが、いかがでしょうか。

加藤 結局文化活動とか、あるいは芸術享受とか、みんなこれは一般市民のほうに主体性があるわけで、だから金を出したからどうということではないし、世話をやいたからど



加藤 衛氏

うということではないし、そういう意味で結局さっきの荒垣先生のお話のように本居宣長とか、そういう人が出てくれば全国がそこに注目するし、そこに一応一つの中心が生まれる。いまだって私はそうだと思うのです。いま横浜で演劇の大会をやっている、なぜ東京でやらないのだ、というようなことをいわれるわけですが、お金とか、行政のほうのお世話とか、そういうことよりも、地域住民がそういうものを自分のものとしてつくっていく、そういう意欲があるかないかの問題だろうと思うのです。

ただその場合に一つ問題なのは、そういう意欲がわくチャンスがいままであまりにも少なかった。眠っている意欲をちょっと刺激を

与えて目ざますという配慮が少なかった。私は文化とか、芸術とかいう場合に、専門家による創造活動とそれを一般住民が享受する、そういうことと一般住民自身がアマチュアとしてやる、ということと、すなわち、「創造」と「享受」というふうに分けた場合に、やはりいままでの領域内でても芸術家の創造仕事というものは商業的な基盤の上でなければ成り立たないため東京に集中していることは事実なんです。だから東京以外の土地に住んでいる人はそういうチャンスに恵まれないから、絵でも何でも本物を見なくちゃほんとうにわからない、芝居でも本物を見なくちゃ自分で実感できないわけです。そういうものがいままでもあまりにもなかったということは事実だし、そのことのために何かちょっと刺激を与えれば盛り上がりが出てくるはずのものが眠っているということはあると思うのです。そういうものに刺激を与える、これはやはり県なり、市なり、あるいは国なりがやらなくちゃいけない。ただ、それはお金だけの問題ではなくて、いろいろな方法があると思うのです。住民の創造活動、自主的な創造活動に介入するという形になってしまっただけ困るけれども、適

当な方法で刺激を与えることは必要だと思います。ですから結局何が大事かといえば、県なら県、市なら市の担当者が市内、県内の市民たちの創造活動をしょっちゅう見ている、あそこはいい仕事をしている、あそこにはわずかな金でももう少しやればもっといい仕事ができるのじゃないかとか、そういうふうにお手伝いすることでもいいのじゃないかと思うのです。そういう場合に、さっき小林先生がおっしゃったように、行政の立場からという結局道路とか、下水とかいうものにとどめてもお金を出したいということになって、それを説得するのになんか理屈に欠ける点があるというところでしたが、私は「芸術創造活動及びその享受」ということは人間の基本的な権利の一つだ」といつもいっているのです。道路、下水と同じように——たとえば私のところは水洗便所になっていない、じゃ水洗便所になるまでテレビは買わないかという、そうはいかない。テレビは買いたい、ある程度の楽しみにする、という見地からすれば、——行政の立場としても、道路、下水もさることながらそういったようなチャンスを提供する、場所を提供するということは徐々にやっていかなければ

ばならないということになると思う。

### 三 地方文化育成の条件

#### △地方の独自性の発揮▽

加藤 もう一つ私がいいたいことは、へたをする、全国を均等化するというこの方向に向かっていくにはほしくないかということ。さっき荒垣先生のおっしゃりたいことの一つはそこにあると思うのですけれども、本居宣長なら本居宣長という人を中心とした文化圏ができたら、これはどこにもない独自のものだと思うのです。私はアマチュア演劇をやっていますが、アマチュア演劇の場合でいえば、横浜独自というところといひ過ぎですけれども、ほかと比べてちょっと独特のやり方をやっています。それはそれで一つの価値をもっていると思うのです。そういうものが出てくることを期待するとすれば、結局最後にはそれをないう主体者である市民のほうに問題がある、ということではないでしょうか。

荒垣 終戦後間もなく倉敷の大原美術館に行ったのです。入ったところにロダンのプロ

といえは、実は何もないのですね。

実際、寄せ集めみたいなもので地方にあるような独自のものを持っていないので、どちらかといえば、地方から持ち寄ってきてそこに集積して、総合的な一大文化センターができたようなところじゃないかと思うのです。ただ、国なり政府なり、中央官庁というものがある、それが費用を出しているいろいろな知恵を出したりするところ、中央としての価値があるわけだと思えますがね。

小林 その点について、私、東京都の文化会館の館長をなさっておりました小山さんとお会いしまして、「東京はなかなかうらやましい」ということを申し上げましたら、「何をおっしゃるのだ、人口なり何なりから見れば、実はホールの数一つにしたって、うんと低い水準だ。それから、毎年毎年、何十万という人口が地方から入ってくる。

ところが、そういう人たちが、実は皆谷間に落ち込んでしまう……。結局東京の文化が高いといけれども、谷間はかりだ。むしろ、お宅の県なんぞがうらやましい。それは、芸術文化は、役所がやるものではないのだけれども、役所がどういう役割をするかに

ンズがあつて、中に入ると泰西名画がずらりとあるわけです。そこに子どもが二、三人だったか四、五人だったかおつて、ほとんどみんなベンチに寝ころんで見ているのです、ずいぶん行儀の悪い子どもだと思ったんですよ。あとで館長に「子どもがぼんやりしながら、しかしかなり熱心そうに見ておつたけれども、寝ころんで見ているのはどうも感心しないのだが」といったら「あれでいいのですよ」というのです。とにかく本物を見ているわけなんだ。行儀が悪いといえは悪いのだけれども、かなり長時間何となしに見詰めている。中国地方で小学校や中学校の絵のコンクールをやると、倉敷がいつも優勝なんです。学校では別に教えるということはないのだけれども、とにかく本物のいいものを直接にしょっちゅう日常茶飯のうちに見ているわけですね。そこであそこの子どもは非常に絵がうまくなくて、コンクールでいつも優勝なんだといつて、たいへん自慢していました。

倉敷の考古館にしても民芸館というようなものがあつたり、町そのものも土蔵づくりの町を保存していますね。いまおっしゃったように、日本全国が画一化して右へならえて、

よって、たいへん大きな影響を与えていると思う。かえって、そういうところで、ちょっとした考え方、少し施策を講じになればうんとよくなる。地方でよくしておいてもらわないと、東京の文化は高くなりませんよ」とおっしゃったのだけれども、私はたいへんいい示唆を受けたと思いました。

#### △地方独自の文化の条件▽

荒垣 群馬県の、「ここに泉あり」の群馬交響楽団ですか、あれはどういうふうにして発生してきたのですか。あれは地方独自ですか。

小林 ほんとうに独自らしいですね。

荒垣 それから郡上八幡の「郡上の立百姓」という芝居をやった、あそこに劇団がありますね。岐阜のはぐるま座ですか、中国まで行ってやったんですね。ああいうものは、一体どういうふうにして発生したのかね。その発生過程をたどることに、一つの地方文化の育てるかぎがあるような気がするのですけれども。

(編集部) 例の群響について申しますと、一生懸命にやる中心人物がいるわけですね。初めは、アマチュアの交響楽団として誕生

日本じゅうどこへ行ってもみんな同じみたいなふうになって、何のおもしろ味もなくなってきたわけですが、そういうときにああいう昔ながらの個性のある町をそのまま保存しているというところに、やはり非常にユニークな文化的意義があると思うのです。ああいうものをほくはあっちこちにほしいと思ふんです。

これはたいへん誇るべき地方文化ですよ。これは何も中央からの補助も育成もなしに、ある一人の先覚者がおつて、その人がたまたま財力を持っておつて非常に着眼もよくて、そこに文化の拠点をつくったわけですよ。これは非常に貴重なことなんだ。やはりあっちこちの村なり、町なり、市なりに、そういったような人間がいるということが非常に大事なことです。

吉里 底辺が広がるのが大切ですね。

#### △地方としての東京▽

荒垣 東京は文化の中心地で、地方は文化が貧しいということをいうのですが、東京には総合的に何もかもある。

しかし東京も一つの地域的社會、郷土として見る場合に、ユニークなものが何かあるか

したので。やっているうちに、アマチュア交響楽団じゃ、なかなかほんとうの音楽がでないというので、ある時点でそれをプロに切りかえたのです。高崎の市長が非常に熱心で、市も相当財政的にバックアップしていったのです。そのうちに、国のほうからも財政援助するようになったのですけれども、要するにあれが、あれだけ育つていったというのは、地元の人たちが非常に熱心にバックアップしたということ、財政的には高崎市もバックアップした。それから、推進者が非常に熱心であったということが、育つていった大きな原因になっていますね。

吉里 住民のニードと熱心な人がおるということ、県なり市の姿勢が非常にいい。三つがそろつていったということでしょうね。

#### △地方独自の文化の中央への紹介▽

荒垣 能登の踊りがありますね。鬼のお面をかぶって太鼓をたたく。あれは非常に迫力のあるもので、あの太鼓はみんなしろとうがたたのだけれども、どこの国へ出しても恥ずかしくない一流のドラマーだと思ふくらいに、迫力のあるのですが、あれは昔しっ中あの辺が、俱利伽羅峠とか、なんだと

か、源氏と平家が戦ったりして兵火のちまたになって、民、百姓がずいぶん苦勞して略奪されたりするものだから、それに対するおどしをかけるために、鬼のお面をかぶったり、太鼓をたたいて、たくさんの人間がおるのだといったように見せるためだったという話を聞きましたけれども、それが一種の舞踊化されて残っている。確かヨーロッパなんかにも何べんも公演に行ったんですね。

あれなんかすばらしいもんですよ。  
ああいうものが、やはり地方にあるのだけれども、案外東京なんかには紹介されていないのですね。

田中 そうですね。

吉里 文化庁で、いわゆる伝統芸能に、現地公開の資金を今度出しつつあるのです。東京に連れてきてもいいのですけれども、現地で公開し、保存することに意義があるということでやり出している。そこからもう一歩踏み出た、新しいクリエイトする文化への姿勢というのは、まだ、あまりないのですね。国にも足りないし、そこら辺をもう少しやるためにも、美術館などをうんとふやしていくとか機会を提供する、場を提供するというところ

集まってくるのです。それが文化的に高く評価されると思うのですがね。

加藤 さっき群響のお話が出ましたけれども、横浜にも戦前からもう四十年近く続いている。アマチュアの横浜交響楽団というのがあるのです。これは地方に出ませんので、横浜だけで毎月定例演奏会をやっているのです。昔はガタ響といましてお医者さんとか八百屋さんとかいろいろの人がやっていたわけでしょう。終始一貫アマチュアでやっておりまして、これが割合根つきまして、固定のファンがついて、そういうことが音楽堂をつくる一つの基盤になっていると思うのです。これは、昭和七年ごろからやっているのです。小船さんという方が、りっぱに指揮して、ずっとやっているのです。これは、アマチュアですから、質的には、落ちるかもしれないけれども、かなり横浜市民に、交響楽というものをはだで知らせる、そういうチャンスを提供している意味では非常に功績が大きいと思うのです。

△鑑賞団体の役割▽

荒垣 労音がやはり地方にそういうものを、非常に促進したのですよ。

ろに重点を置きつつあるわけなんです。

△文化施設の必要性に対する認識▽

加藤 文化施設ですけれども、たとえば美術館でもそうだし、文化会館とか、そういう場合に、いつも私が感ずることは、ある程度必然性はあるのですけれども、かなり外的な刺激でつくるという、だから、ある市が美術館を持つとうとするとき、なぜその市でいまだという種類の美術館が必要かということの検討なしに、あそこでもできたから、じゃあ、うちもなくちゃおかしいじゃないか。簡単に言ってしまうばそういうことで、全国の文化会館、市民会館のかんりの部分が、あそここの市にもあるのにうちの市に一五〇〇人も入るホールがないのはおかしいじゃないか、ということ、できあがってみると、さてそれをどういうふうに一一般市民が使うかということになると全く困ってしまうという例が、いくつもありますね。

また本物の絵なら絵を、巡回展覧会で見せる場合に、そういう施設がないために、その市民が接触することができないという不幸がありますね。そういう場合には、展示場がある必要があります。けれども、日常的に市

これは、経営的にも成り立って、つまり、音楽鑑賞者というものを非常にふやして、すそ野を広くしていった。それが一つの促進剤になって、地方にもいろいろホールができるというような一種の手柄も、労音にはあったと思うのです。これは認めていいと思うのです。

小林 それと、逆のいい方になりますけれども、たとえば三重県の労音の動員がどうしてできたか聞いてみますと、県の文化会館のホールができた。それに相呼応して、ホールができるなら大いにやろうじゃないかというようなことなんです。それで、ホールを拠点にして育ててきているわけです。

荒垣 因となり、果となり、お互いに作用しているんですね。

小林 そういう機運もあったからでしょうけれども、公共的な施設があったからでもあると思うのです。個人的な芸能ならともかくとしまして、集団的なものは常に公共的に開放してあげないと育っていかないのでね。

吉里 文化庁でやっている青少年芸術劇場で、オペラを持っていくとか、能、狂言を持っていても、子どもたちは初めて見ている

民がいつでも美術に接触できる場として、美術館を必要とするならば、その市民、あるいは設置者が、どういうところに美術館の意味があると考えているのか。何か独自のその地域社会に根ざした要求にそった市民会館なり美術館なりができてほしい、そうならないとただ美術館ができました、市民会館ができましたというだけで終わってしまう。

荒垣 横浜の音楽ホールは非常に音響効果がいいというので、——あのころ、東京にも、あのぐらいのミュージックホールはなかった——結局一流の音楽会ということになると横浜へ行っちゃったわけですね。

東京は、日比谷の演説会場で音楽をやったんだからね。そういう点で、横浜なんかはミュージックホールの先駆者的な意味を持っていますね。

また、鎌倉というのは、東夷の中の昔の文化の中心地だったわけですが、鎌倉近代美術館ができて、あそこで木食だとか円空の展覧会をやったりすると、全国から見に行くのですね。

そういうようなことで、何か一つのほかでまねできないことをやると、そこにみんな

わけです。

もう一ぺん見たいという刺激が出てくる。そのために、文化会館もほしいとなる……。そこをねらっているわけですね。

△地方に対する刺激▽

それから、もう一つ、芸術祭の地方公演をやっておりますけれども、まだ小規模なんです。それを今度は、全国を四つぐらいに分けて、そこに、東京でやる芸術祭と同じ規模のものを県と共催でやろうと思っているのです。行き帰りに、二種目ずつぐらいのものを廻すつもりです。そういう刺激を与えることによって、小林先生のおっしゃる文化会館も、あるいは美術館も必要だという刺激を与える一方、住民の芸術的レベルを高めていくというような構想を持っているのです。どっちが先かわからないけれども、ともかく住民そのものの基盤が高まるのが一番大事だろうと見ているのです。プロの問題はプロの問題で、芸術行政として考えなければいけないと思うのです。

△国体方式の採用▽

荒垣 住民が非常に熱心になることです

国体というのは、全国各県が持ち回りになつて、国体を目当てにして、いろいろな競技施設みたいなものをたくさんつくって、県民なり市民なりは、税金の上で負担になったりするのですけれども、ともかく、おらが国で国体があるという、たいへんな人気になるわけです。

国体でもジブシー選手をやったり、主催県は必ず優勝して天皇杯をもらうというようなことがあったり、いろいろ弊害もある。弊害もあるけれども、やはりそれを機会にスポーツの競技場みたいなものが、総合的に、各種類のものができるといふことはありますね。

あれのように、たとえば芸術杯みたいなものをつけ加えるとか、万国博でも、あまり人は行かなかったけれども残ることになった美術館……。

田中 大いに入りましたよ。

荒垣 しまいには、大いに入ったんだけれども、初めは閉古鳥が鳴いておった。万国博にも、ああいうものがあって、単なる科学技術の産物とかいうようなことだけではなしにやはり芸術文化だとかいうようなものを

集めたわけですが、国体にもそういう部門があってもいいのじゃないかと思うのです。

田中 国体には、全国からチャンピオンが集ってくる。それよりも、地元がもう一つ奮発して、いい成績をとる……。こういうことを、芸術文化に応用したとすれば、非常に大規模な芸術祭ができる。

ことは、札幌とか、その次は福岡とか、一カ所に集めて、そこで東京でもやれないようなものをボンとやってみる。そこで、ワーストと盛り上がりてくるんですね。

荒垣 オリンピックにも芸術部門があるのじゃないですか。だから、国体の中に入れてもちっとも不自然じゃないですね。

あれだけとにかく盛んになったのですから、そして一種の全国的な祭典になっているのですから、ああいうものは、地方文化を普及し広げるといふ意味において、非常にいい舞台じゃないかと思うのです。

△移動芸術祭の構想▽

吉里 私どもの構想では、いわゆるアマスポーツと、芸術文化の催しとは少し違いがあるのです。私どもが考えていますのは、ほんとうの芸術を地方でやる。と同時に、それ

文化活動が制約を受ける。  
そのところは、気をつけなければならぬのじゃないかと思うのです。

吉里 違う点でもあるんですね。

加藤 もう一つは、演劇の場合に、これは皆さんご承知と思うのだけれども、全国大会に出場することを最終目的にして演劇活動をするわけ。ただ出場するためだけに演劇活動をやるとなると、演劇活動の意味がない。だから、地元で根づいていて、その結果として全国大会に出るといふなら、話わかるのですけれども、全国大会で最優秀とか、優秀をとることが、最終目的になるようなそういう演劇活動になってしまう危険がある。

吉里 その配慮をしなくちゃいかんという事です。

加藤 もっと日常生活に根ざした芸術文化活動になってこないといけないと思うのです。

荒垣 芸術祭というものは、みんな東京に持ってきてやるのですか。

吉里 大体、全国のいわゆるプロの芸術の祭典をと思っているのですが、現在の状況を

見ますと、東京にある優秀な劇団とかなんとか、主催公演し参加しということになっちゃっているのです。

どうしても、そういう劇団にしても、文化施設にしても東京に偏在しているわけですから、

荒垣 そういうところが、どうも日本は狭い島国のくせに、はなはだ中央集権的な問題ですね。アメリカ五〇州のうち、カリフォルニア一州にしか広さは当たらないわけでしょう。そういう小さな国であるのに、ひどく中央集権的で広げないのだな。だから、せめて道州制的な考えを持ち込んで芸術祭なんか全国五、六カ所ぐらいを持ち回りでやると、これは地方に、最もすぐれたものを与え見たり接したりするチャンスが出てくると思うのです。

先ほど加藤先生もおっしゃったように、本物を見なければいけない。にせものはだめだということ。

結局、テレビみたいなもので、にせものばかり、みんな見ているわけですね。

歌舞伎にしても、音楽にしても、野球にしても、テレビだけでも見ている、ああいうも

に合せて、その地方の、いわゆるアマの方々の部門を設けて、やっというじゃないかというような構想を描いているのです。またそこに美術部門もつくる。そういう刺激を与えれば、外からの刺激で、施設がつくれるというのもおかしいのですけれども、まともなものができていくのじゃないか、あるいは、住民の芸術的レベルも相当高まっていくのじゃないかというようにことをねらっているわけ。うまい名称がないので、移動芸術祭といっているのですがね……。

田中 美術と音楽と演劇とを、国体と同時にやるとだいぶわき上がりそうです。

△日常生活に根ざした芸術活動▽

加藤 全国青年大会、そこで演劇部門、いろいろな文化部門もあるので、うしろでも、開催についての諸条件がスポーツを基盤にしたところから出発しているというので、演劇部門は非常に制約を受けているのです。そうじゃなくて、もっと演劇なんか自由な青年団の連中にやらせたらどうだということ、そういう制約をやめたいのじゃないかというのですが……。どうしてもスポーツが主体になるとスポーツに引きずられて

のだと思ひ込んで本物を見ようとしないうちです。意欲さえ起こさんように、飼ひ慣らされてしまふわけです。

役者自身も、だんだんとテレビ向けになってきてしまつて、たとえば青年歌舞伎なんか見に行っても、口跡が聞こえやせんですよ。

何をいつているかさっぱりわからん。つづも立っていないしね。その中に、三津五郎と養助が入っていったんですが、この二人の声は、ピーンと響いてくる。どういふわけなんだと、三津五郎に聞いたら、「それはテレビですよ」つまり、みんなマイクを使ってやることだけしかしていない。発声の練習なんていうことは全然やらないのだ。

若手歌舞伎の中に入ると、昔の発声で鍛えたせりふだけがパンと聞こえる。

#### 四 芸術活動助成のあり方

△アマチュア活動の今日的意義▽

加藤 それから、ときたま労働やその他のチャンスに、東京の劇団が来るでしょう。そういうことがあって、この間、和歌山で、ある青年が、テレビや何かで日常的にそういうも

のが享受できるのだ。ときたま、職業劇団も来る、こういう状態の中でなぜアマチュア演劇が必要だ、なんということをいい出すのです。

だから、それは誤解だ。アマチュア演劇というのは地域住民が、自分たちのほんとうに表現したい意欲を満たすための、一つの活動なんであって、必要とか必要じゃないとかそうじゃなくて、やむにやまれぬ気持でやる。

それを住民と一緒にやってつくり上げる。自分でつくり上げるもので、これは必然的に生まれてくるものなんで、いくら東京の劇団が来ようとテレビで何を見せようと、そんなものとは無関係といってはおかしいけれども、それとは別の自分たちの力を十二分に發揮する場なんだというふうにいったのですけれども。地方では、いまおっしゃったように、テレビを見ていればそれでいいのじゃないか、安易な気持ででき上がったものを、ただ一方的に寝ころんでもらっているという傾向がみられる。こういう状態の中では、まずまず自分たちの手でつくるということの必要性を訴えることが重要なことだと思う。

#### △アマチュア活動への助成▽

もう一つ別の意見は、そうやってもボスが集まってくるからだめなんだ。それよりも個々の団体の育成をやったほうがいいのだという意見があるのですけれども、これは大体どういう方向が適当でしょうか。

加藤 それはつまり行政のほうへ何かを要求する、あるいはお願いする場合に、個々にいってもだめで、同じような市民活動、文化活動をやっている連中が協力する。たとえば、横浜でスカイ劇場というのに市が五千万円出したのは、われわれ市内の十一の劇団が連盟をつくりまして、受け入れ態勢ができた何とかしてくれ、ということを出たという形になりますね。

そういう、要求というか行政当局にたのむ場合に、個々ではちょっと通らない。共通の課題を見つけて、そこで市民会館なり何か会場をつくる場合でも、あるいは市民会館をつくる過程で、設計の面でたとえば音楽、演劇、舞踊関係者がこういう舞台にしてほしいという要求を出す場合に、共通の基盤でいえば、これはかなり、それが反映するということがありますね。しかし補助金の分割機関でしかない団体もあるわけです。

吉里 そのとおりですね。ただ、行政の面で、アマチュア演劇なら、アマチュアの活動の何かお手伝いする面があるかないかということもいつも考えるのですけれども、当然下から盛り上がってくるものですからいいと思うのですけれども、何かお手伝いすればもっと伸びるというようなことがありませんか。

加藤 それは、チャンスと場を提供することですね。その場合に、ほんとにアマチュア演劇は自発的に公演の場を持てばいいのですけれども、そういう力がまだ十分でないときに、県なり市なりが、何とか祭とかそういうチャンスをつくり、場を提供するということがあれば積極的に参加する。

それから、さっきおっしゃったように、文化会館や何かできるから、そこで初めてそういうものが刺激されて生まれてくるということもあるわけです。そういう場所はつくらなければいけない。

そうすると、アマチュア演劇にとって、全国の市民会館、文化会館は、非常に豪華な施設なんで使い切れない。会場費は高いし、だから私は、二百人か三百人ぐらいの小ホール

これは、日ごろ何もしないですよ。それでは意味がない。文化祭なら文化祭をやって、そのあとで反省して、ことはこうだったけれども効果がなかった、じゃあこうしよう、来年それを取り入れてさらに進めていってやるといふそういう連合組織ならば、私は意味があると思うのです。

吉里 個々の団体が、しっかり発展してあって、その連絡会議……。

加藤 そうですね。

△助力のマイナスの作用―美術の場合▽

吉里 美術の世界はどうですか。

田中 美術の世界では、特別な援助なしに、たまには新聞社の援助がありますけれども、わりに成長しているのですね。

先ほど、現在の美術に対して、官庁とか、あるいは新聞社とかいう特別なてこ入れをしないほうがいいと思うのです。それはむしろ、ボスの横取りというふうな形になって出てきまして、この間、ある地方に行きまして聞いたのですけれども、やはり、地方だけでいばっているボスですね。全国的に通用しない、そういう者がいて、これが、地方の美術館長を非常にじゃうずにあやつて、自分た

が併設されてそこでアマチュア演劇の自由な活動の場を提供するという、そういうことが必要じゃないか。

横浜には、幸い市長がそういう配慮をしてくれて、われわれ毎月ただで借りられる会場ができたのですが……、補助金もさることながら、そういったところで配慮するということが、まず、いま必要じゃないだろうかと思うのです。

吉里 条件の整備ですね、われわれの役目は……。

加藤 その上で、なおかつやるほうの側がいくらお金をもらっても、そのことのために毒されないというふうなふうに、お金はお金、自分たちは自分たちというふうにはっきりしてければ、補助金をどんどん出していいのじゃないかと思うのです。

△文化団体の役割▽

吉里 それから「地方芸術文化振興会議」あたりで問題が出たと思うのですけれども、県内に、美術家の団体とか文化団体というものはいくつもあります、それらを全県一本の総合団体を育成してはどうかという意見があるわけです。

ちのグループだけで、独占的なことをやるというようなことがある。中央にいる人は、そういうことをよく知っていてほしいという訴えを聞きましたかね。

私は、北海道生まれですから、向こうのことを多少知っていますが、北海道に、こちらでいえば県展のような形のものが、二つあるのです。一つは道展——北海道美術展、一つは全道美術展、同じような性格を持ったものが二つ。戦前から続いているのが道展で、戦後にできたのが全道展なんです。これは、道から全然援助がないのです。

地元新聞社は精神的な支持を与える程度です。宣伝的な役目をする。この二つが、非常に活発なんです。いまは、両方とも、どっちがいいとも悪いともいえないくらいなんです。そして、それぞれ自前で相当な出品者を集めて、会員が費用の足りないところを出し合っていていますが、これは一番健全に成長していると思うのです。

その例を見まして、周囲からあまり援助の手がないほうが、むしろいいだろう。あったほうが、かえって悪いような結果になるのじゃないかと思うのですがね。

加藤 美術なんというのは個人作業です。から、そういう意味ではなまじっか手を出さないほうが、私はいいのだろうと思いますね。

#### △芸術文化の場合としての文化施設▽

荒垣 地方にたまに講演なんか頼まれていって一番わびしい思いをするのは、くつを脱がされてスリッパをはく。あれは実にわびしいですな。学校なんかだとそうなんです。雨天体操場みたいな音響の悪いところで、くつを脱がされてくつ一枚だと第一安定性がないし、冬なんか寒くてしょうがない。あれは実にわびしい。それから、聴衆がいすがなくてござを敷いてすわったり、それからあきかんだとかいろいろな灰ざらみたいなものを配って、あんなのを見ているとあとが心配で、うちに帰ってから、私が講演をやったあとで火事が起きやせぬかと思ったりしてね。

#### 吉里 問題は場の提供ですね。

小林 私は行政の立場から見ただけですけども、小さな市というものと圏域というものとは、少し違ってくる。それがある程度認識してからしないと、行政がきちっといかない。たとえば鈴鹿市……これは市長さん

とても音楽だとかそういう方面にたいへんに興味を持っている。りっぱなホールをつくらなければならない。なぜそういうホールをつくられたかといいますと、鈴鹿市は、ご承知だと思いますが、本田技研とか、戦後たくさん紡績が来りました。過去は田園都市のようなもので部落があちこち散ってあったのです。それをまとめて一つの鈴鹿市という大きな広域的な市ができた。いってみれば大きな部落

なわけなんです。そこにたくさんさんの工場ができて、新しい人たちがたくさん入ってきた。在来の人たちがいる。市としてのまとまりがない。何かやりにくいという角度から、そこにもってきて市長さんがそういう面に興味を持ってもらえる。だもんですからりっぱなホールをつくられた。それによりまして、新しい方々もその土地に対する親しみを持ってこられた。それから、在来の人たちもそういう人たちの交流をするようになった。すばらしい音楽や演劇を、どんどんお金をつき込んで、いま見せておられるようです。市としてのそういう必要を感じておられるということ、その利益がすぐにまた還元されるわけなんです。そういう姿勢をおとりになり、たいへん

すばらしい成果をあげつつある、変化が起りつつあるわけです。しかし、それが、県ぐらいになりますと、県庁の所在地なんか中心都市があり、ほかにあまり大きな都市がないような県と、それから小さな都市がずっと並んでいるような県、南北に長いような県、狭い県、それによって具体的には施策の出し方が少しづつ違ってくるわけで、そこで具体的にものを考えていかないと、その土地に密着した施策になりにくいと思う。だから私は、やはり公共団体としての共通原則はあるにしても、施策の出し方については、相当きめこまかに実情を見きわめて施策を出していかないと空転してしまうということを考えるわけなんです。

#### △音楽の振興▽

田中 きょうは音楽関係の方は見えていないのですか。

吉里 きょうはおいでいただいていないのです。

田中 地方の交響楽団の全国的な音楽会というふうなものを考えてあげるとか、それから、世界的な音楽コンクール、バイロイトの音楽祭とかああいうようなものを日本でやっ

てみるとか、いろいろなコンクールが各国でたくさんありますね。どこそこのコンクールで一等賞になったとかいうニュースがずいぶん入ってくる。日本にそういうコンクールが何も無いようですね。

荒垣 NHKみたいなところがコンクール的なことをやっていますね。

田中 盛んに個々に連れてきて演奏させて金をとっているぐらいで……。

吉里 コンクールまではいま考えていないのですが、交響楽団については、全国に幾つぐらい必要かという問題がありますけれども、育ち得るところは、国と県、市で相当お金をつき込んで、人件費程度はもってやっているわけなんです。

## 五 地方の再発見

荒垣 芸術文化活動を地方のほうにということとは非常にいまタイムリーだと思うのです。一種の郷土喪失といいますが、そういう気持ちで都会人の中にはあるわけなんです。一種のUターン現象が起っているわけですね。大都会にやってきたけれども、結

局、物価は高いし公害だの何だのあるし、暮しにくいということから、もう一ぺんUターンをして自分の郷里にまた帰ろうという動きが一般的にある。たとえば小林秀雄とか永井龍男とか、あの人たちは皆東京生まれなんです。だからほんとうの郷里みたいなものはないのです。飛騨の高山にきたら、おまえ、いい郷里を持っているなあというわけです。これがふるさとというものだということに、非常にふるさとをほしがっている気持ちがあるのです。テレビなんかでも「ふるさとの歌まつり」とか、地方芸能みたいなものを電波にのせるといことが、民放でも各社競争的にやっておるようなことがあるでしょう。それから一種の旅行ブーム、旅行関係の出版、たいへんなものですよ。ですから、非常にいま地方に目が向いているわけですね。日本には古くから伝統とか年中行事とかがあったわけですから、これが大都会にはもうなくなっちゃったわけです。ことに団地なんかにはもうないですよ。ただ、東京でも下町の浅草、本所、深川あたりでは昔ながらの行事みたいなことをやっていますけれども、団地生活だったら何の行事もない。しかし、伝統や

年中行事など古くから伝わったものをいま保存して維持しているのは、地方の小さな中小都市や町、村なんです。これは非常に貴重なものになってしまっている。大都会においては見られないわけです。そういうものをいかに行けば見られる。そこに一種の郷愁を満たされるようなものがあるのです。飛騨の高山が心のふるさとだと、藤村の妻籠ですか、あそこが心のふるさととか、松江がそうとか、森鷗外が生まれた津和野、そこが心のふるさとだといろいろな心のふるさどが方々にあるわけなんです。そういう地方を恋うる気持ち、これが勃興していると思うのです。

#### 吉里 地方の再発見ですね。

荒垣 そういう意味で、いまこういうことを文化庁でねらっておやりになっているのは非常に時宜を得て、タイムリーで、成功する可能性があると思うのです。

## 六 文化施設の今後のあり方

吉里 それからいわゆる地域の住民のセンターといわれている公民館、私も実は十年は

ど前、公民館行政をやったのですけれども、どちらかというと社会教育行政としてとらえておりますから、そこに文化的な側面をどうしても入れたほうがいい。現実には村なり町なりで考えますと、日曜画家にしてもアマチュアの演劇にしても場がない、公民館だということになると、そこら辺の脱皮を少し考えておかねければならない。そこら辺、小林先生あたりずいぶん苦労されたのじゃないですか。

小林 確かに、県なら県の文化会館というもの、各都市が持つ地方公民館との連繫ですね。たとえば、地方公民館というものができて、この間の「地方芸術文化振興会議」でも一つの意見が出ておりましたけれども、地方公民館をせっかく今後つくるのなら五、六百ぐらいの音楽をやら演劇もやれるようなホールを持ちたい。そこら辺への国としての姿勢をはっきり示していただきたいと思うんですね。

吉里 それは反省というか、新しいアイデアを私自身として持っているのです。その殆どはフランスに文化の家、日本でいえば公民館ですね、フランスの文化の家的な施策を漫

透させていっているのです。そこで日曜には日曜画家がやるし、あるいはアマチュアが演奏する。いろいろあるわけです。そういう考えを末端まで場を提供すると同時に刺激を与えるという意味で、少しやってみたいと実は思っているのです。

加藤 そこで問題が一つあるのですよ。地方を歩いてみると、公民館の管理をやっている方、この方がたまたま教育委員会にいて、たまたまその地位についたというだけで、やがて二、三年たつとよそに行く。そういうことで、ただ一つのステップでしかない。自分はこの仕事はいやなんだけれどもしょうがない、来ちゃったということで、利用者にとって不便な使わせ方をするのがある。ですから管理者に人を得るということですね。

いまフランスの例が出ましたけれども、東ドイツなんかでも全国に七千ぐらいのクラブハウスがあって、そこには演劇、音楽、文学、あらゆる資料があって、そこに相談に行けば、そこにいる管理者がかなり専門的な知識を持っている。わからなければ専門家を紹介してくれる。そこまで世話をやいていいのじゃないかと思うのです。いまの公民館が建物

があって部屋を貸してやるという単にそういう貸し部屋業みたいなことで終わっちゃうという傾向もあるわけなんですね。

小林 確かにそこら辺に、行政の立場で人事の問題でも反省し考えるべきところがあると思います。そこには、ある程度芸術文化を尊重するという考え方が行政の幹部の方々にもないとなかなかそうはいかぬわけでしょう。

加藤 横浜の飛鳥田市長というのは私の親友だもんですからよくいうのですけれども、施設をつくったら専門職をもっと大事にして、つまり一カ所に十年、二十年いても、役所の中で出世の道が開けるような、動かなければ月給も上がらないというのじゃ困る。これは特殊なんだからということという、役所全体から考えるとなかなかそうはいかないという現実があるわけですね。そういった点でそういう文化施設の場合にはことに専門職というものを大事にして、そうしないと、せっかく利用できるような施設がありながら利用しにくいということがしばしばあるのじゃないかというふうに感じますがね。

荒垣 公民館の館長さんとか、市民館の

館長さんとかいう人は、県庁とか市役所とかの公務員ですけれども、出世の段階でしり軽にあっちこっち行く人ではなくて、大体においてその土地に住んでいる人になっているのじゃないですか。

吉里 大部分はそうですね。

小林 だんだんそういう傾向になってきていますね。

吉里 それは結局、住民のニーズが強くなるからですよ。

小林 こういうことを感じますね。これまでの役所というのは大体事務をとる役所として果たしてきたわけですね。ですから、勤務時間は朝八時半から五時までということになっている。ところが文化会館、ホールができてくると、これは夜の仕事なんです。大部分の人は夜使いたいのですね。それに順応できるだけの形が行政の中にあるかということになってくると、やはり一番使わないときに職員がおって、一番使うときにはいなくなる。そこらの問題を考えていかないと、今後ほんとうに伸びていきにくいと思うのです。

田中 美術館なんかでもみんなそうなんです。アメリカあたりの美術館は夜の七時まで

あります。たいてい、あちらの美術館というのは朝はおそくても夜は開かれています。市民は事務を離れてからそういう文化施設を利用するのですから、都の美術館あたりもこのころはいよいよ嚴重になりまして、五時になったら一斉にホタルの光が何か演奏する。年末の大みそかにやる曲を聞かせておいて、そわそわさせておいて、そして追い出してしまふ。非常に不愉快なんです。

荒垣 最近の役場でも、サラリーマンのために日曜も開いて何人か置いているというようなことをやっておりますが、診療所なんかも昼休みの十二時から一時まで開いて、診療所の人は一時からあと二時まで休むといったようなふうにしたり、ですから、晩なんかでも五時、六時に締めたんでは、仕事をしてそれからという人はだめなわけですね。ある程度時間を伸ばしてもらわないと、利用できないわけですね。そういうところになかなか、生きた行政というものはうまくいっていない。

吉里 生きた行政をやらなくちゃいけませんね。

## 七 残された問題

吉里 マスコミの問題も相当文化行政として考えなくてはいいけないし、もう一つは学校教育と文化行政の関係をどう考えたらいいか。正直にいうと、いま文化行政として学校教育との関係はセパレートされたかっこうになっているわけです。それではいいけないのじゃないか。芸術教育という面でも文化行政が相当タッチしていかないといいけないのじゃないかという説もあるわけです。そこら辺とか、あるいは第二国立劇場を国でつくったほうがいいのか、あるいは第二国立劇場を国でつくったほうがいいのか、クリエイトするほうの芸術としてというようなことも考えているわけなんです。そういった点について、幾つかご発言をいただきたいと思えます。

### △第二国立劇場▽

加藤 もし、東京に国立劇場をつくるならば、理想的な形、つまり中身のある国立劇場、つまり役者もいない、借りてきてやっているという国立劇場というのはおかしいのです。その劇場が役者をかかえて、いつでも一番いいものができるというような用意がな

ければ、国立劇場としての価値がないと思うんです。

吉里 なかなか急速にはできないと思いますがほんとはそれをねらっています……。

荒垣 イギリスやフランスの国立劇場というものは、劇団までかかえている。モスクワにしたって、持っているわけですからね。日本では、これはなかなか一朝一夕にはできないですね。

#### △美術教育▽

田中 私は、美術大学で教えていますが、私が考えるのは、高等学校の美術教育の問題です。いま随意でしよう。随意でも、いいと思うのです。しかし、随意であるけれども、美術志望者が、充実した美術教育を受け、高等教育へ進めるようにしたいと思います。しかし、やはりいまの高等学校というのは、大学受験のための高等学校ですから、そういう芸術文化関係を志望する学生なり、先生なりは、たいへん肩身が狭いのです。そして何か日陰者のような扱いを受けるわけです。

数学の先生と英語の先生は、非常にいばっているようなもので、これはやはりものとたてれば高等学校が予備校化したところにある

は仕事をしていると思うのですが、しかし、もっとご注文があれば、われわれもOBとして、社のほうにアドバイスいたします。

小林 新聞については、こんなことがもう少しお願いできたらな、という感じがいたします。それは名古屋あたりに、いろいろないものが来るのについては、名古屋本社というところがあって、相当書かれるわけです。

ところが、地方まで忙しいのでしょうけれども、美術評論家という方は、あまり書かれない。そういう方が、各県で一生懸命やっているのを、あたたかい気持ちで、批評をいただくなり、やはり、しろうとでも批評をいただくことは、うれしいのですよ。

そういうことを、もう少しやっていただけないものかという気がいたします。

荒垣 地方にも有力新聞社があるでしょう。そういうところも、なかなか財政的な基礎がよいものですから、ずいぶん中にはやっています。

吉里 「九州沖縄芸術祭」なんというのは、西日本が中心になってやっているのです。裏にかくれていますね。

荒垣 外国もありますし、ローカルカラ

で、ところが、高等学校というのは、将来自分は芸術に行こうか科学に行こうかというところをきめるときなんです。一種の思春期ですし、何かあこがれの非常に強くなる時期です。このときに、やはり自分の志望しているものに素直に進めるようにしたいとぼくは思いますね。

#### △新聞社の役割▽

荒垣 私は、美術文化の振興に新聞社がいぶん協力していると思うのです。学芸欄とか文化欄には、芸術関係、演劇、文学、音楽、ありとあらゆる分野のことを、しょっちゅう書いて紹介しておりますし、そのほかに、新聞社に事業部とか企画部といったものがあって、美術展だとか、音楽会だとか、演劇だとかを、しょっちゅうやっている。新聞社が主催して、あるいは国立美術館と共催になったり、国と共催なんかして年がら年中やっていますよ。

田中 日本の新聞社が世界的だそうですね。

荒垣 読売新聞でも「ミレー展」をやったし、日経が「英国風景展」というのをやっているでしょう。

ーがあるもの、たとえば、名古屋あたりでは篠だとか瀬戸だとか、ああいうようなものをやったり、狒犬なんかのことをやったり、円空なんかも一番中心で、あの辺に作品がたくさんあるものだから円空展をやったり、そういうふうにならりローカルカラーのあるものを、それぞれの地方でも相方やっていますね。

#### △学校教育と芸術文化の素養▽

小林 芸術と学校教育の関係、これもいろいろな関係があるわけですし、特に地方の場合には、音楽、演劇、美術、文芸等の芸術文化活動における指導者が、その地方の高等学校の先生であったり、大学の先生であったりする場合が多いわけです。そういう意味の関連もあるわけですね。そういう場合に、地方における、教育大学なら教育大学の学生は先生になって、みな県下に散っていくわけですね。そういう方々が大学の中で、芸術なり何なりを、ある程度、素養としてこなしてくれるか、もうちょっと大学教育の中に、そういうものを持ち込んでいただきたい。

先生の影響というのは大きいですね。数学の先生なら数学の先生が、中学校なり小学校

田中 朝日が「モネ」をやった。

荒垣 ミロのビーナスを一品だけやったり、フランス美術展をやったり、それからモスクワ芸術座だの、レニングラード交響楽団だの、英国の劇団を呼んだり、読売なんかでポリシヨイのオペラを呼んだり、そういうことを盛んにやっています。国内だけでなく、外国の演劇、文化、美術なんかを日本に紹介して、ちゃんとあれは採算も取れているのですよ。

朝日が、「エジプト展」や、「ツタンカーメン展」なんかやったときに、例のアプシンデル神殿の一部をかき上げるアスワンダムの水没すべきものを、上に移築する資金にも、入場料の中から出しておるのですね。

外国に行ってもちよっと見られないものを、各新聞社がかわりばんこにどんどんやって、ほんとうに、日本くらいそういう点では目の肥えるチャンスを持っている国はないくらいですね。

それを、東京だけではなしに、京都でもやり、それから福岡に持っていったりやり、というふうに、地方にも持っていったりやっていますから、地方文化の振興にも、かなり役立っ

教育の中で、一言そういう関心を示すと、子どもに、どれだけ大きなヒントになっていくかわからないというような点があるのですね。

加藤 アマチュア演劇に関していうならば、高校演劇が、非常に地方で大きな役割を果たしているのです。高校演劇を卒業した連中が、今度は、地元でアマチュア演劇活動をするときに、必ずしも、地域住民との関係、それをほんとうのところとらえていない部分がかかなりある。つまり、何か自分の道楽でやってしまうという危険があるわけです。文化活動をする、結局は人間の問題で、なぜこの時点で、各地方地方で、絵なり音楽なり演劇なり、そういった文化創造活動をやるかということの、生活とのかかわり合いの上で、もって真剣にとらえるということから出発しないと、単にお遊びに終わってしまう危険が、かなり、演劇に関していうと、あるのです。そのことが、今後の地方文化振興の面で人間の問題に還元されちゃうのですけれどね。いまおっしゃったように、小中学校の先生方が、ほんとうに演劇とは何だということ、あるいは美術は何だということを、その人なりに

とらえられていてそれが影響を与えるように  
なると、これは非常にいいことだと思いま  
すね。

#### △共通の文化的意識の形成▽

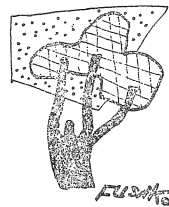
・荒垣 日本のいままでの総理大臣というも  
のは、百人ぐらいいなるか、もっと多くなる  
か知れませんが、東京出身の総理大臣  
というのは、たった一人しかいない。鳩山一  
郎だけです。あとは全部いなかですよ。初め  
は薩長閥、いまも長州閥ですけども、岩手  
県だとか福井県だとか、ほんとうに地方の出  
身ばかりで、けれども、とにかく政治家にな  
った以上は、総理大臣になって、文化も含め  
て、政治の最高責任者なんです。文化もそれが  
東京から出ていない、みんな各地方のむしろ  
僻遠の地なんです。あれは実際おもしろい  
現象だと思うのですがね。

小林 芸術、文化という問題を、おそらく  
芸術家は、芸術家の立場からいろいろ不満も  
あるし、もっとこうしてほしいというような  
夢も理想もお持ちだと思えます。行政官は  
行政官としてある程度持っている。政治家だ  
って持たぬわけでもないし、国もお考えにな  
っているし、県なり市なりもそれなりに考え

ているわけです。しかし、やはり最初にいい  
ましたように、芸術は説明しにくい。芸術そ  
のものの評論はいくらでもありますがそれど  
も、芸術の社会的に持っている意味だとか、  
人間にとつての意味だとか、これからの時代  
に持っている意味だとか、地域社会に持って  
いる意味だとか、それから、伝統というもの  
と新しい文化と、どういうかね合いを持っ  
ているものか。このような時代にどのように考  
えるべきか、いろいろな議論があるわけです。  
そういうことについて、たくさんの方は  
あると思うんですけども、たとえば、芸術  
文化というものについての論文募集でもいい  
のです。何かそういうことについて共通の  
場、文化的意識というか、芸術的意識とい  
うか、そういうものを、もうちょっとよく考  
えていかないと、議論が混線する場合が多い  
ということを感じます。

吉里 これはすぐできるかどうかわかりま  
せんけれども、文化庁ができて、芸術文  
化を主管してやり出した。もう一歩進めま  
して、芸術家の方、行政官もともども、国とし  
て地方との関係を一貫して見た場合の、芸術  
文化行政の長期ビジョンの策定をやりたい

と、実は思うのです。それをどういう形でや  
るか、いろいろありますが、芸術文化振興会  
議的な諮問機関になるかどうかわかりませ  
んけれども、いろいろな形で相談をしてもら  
う、その基盤には、地方芸術文化振興会議で  
出た意見を吸い上げてくるとかいうようなこ  
とを考えておりますが、本日出ましたいろ  
んな示唆を紙面に載せ、愛読者からの意見も  
期待したいと思えます。きょうはどうもあり  
がとうございました。



急激な社会の変貌に対処する

社会教育のあり方について

——社会教育審議会中間発表—— 柴沼 直

＊座談会＊

社会教育審議会の中間発表をめぐって

(出席者) 大石 脩而・加藤日出男・村井 実

鈴木 勲(司会) 鹿海 信也

社会教育と社会教育行政

今村 武俊

マスコミと社会教育

麻生 誠

企業内教育の実態と問題点

岩渕 英之

(資料) 社会教育審議会答申案要旨

〔現地ルポ〕 山形県八幡町中央公民館

◇秋は文化の日を中心として、さる十月一日に開幕した芸術祭祝典に始まり文化勲章の授賞、文化功労者の顕彰、また地方での優良な施設の表彰など全国で各様の文化行事がもようされております。

最近の経済社会の急激な発展と成長が進むにつれ、文化財が破壊の危険にさらされております。先人の生み出した文化財を国民各自の財産であるとの自覚のもとに文化財愛護の精神を高めなければなりません。また今年には文化財保護法施行二十周年にあたり文化庁はこの十一月四日に文化財白書(文化財保護の現状と問題)を発表しました。

◇本号では芸術・文化を特集しました。巻頭では今文化庁長官に地方と文化と題して論じていただきました。座談会では「地方芸術文化活動の育成について」と題し諸先生に芸術文化行政の現状と問題点および育成などについて話しあっていただきました。なお、昭和四十四年度地方芸術文化行政状況調査の結果を掲載しました。

MEJ 5120 月刊 「文部時報」 11月号 第1120号

文 部 省

昭和45年11月5日 印刷  
昭和45年11月10日 発行

著作権  
所 有

発行所 株式会社 帝国地方行政学会  
本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
(郵便番号 104)  
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地  
(郵便番号 162)  
電話 東京(268)2141(代表)  
振替口座東京161番  
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定 価 80円  
年間購読料 960円

\* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。  
\* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはほとりの書店にお願いいたします。